

編物復元—その3—

富山県埋蔵文化財センター

ヒノキを編材に加工する

①ヒノキの枝を、芯と樹皮に分ける

芯は縦の条材、樹皮は横の条材となります。台石の上にヒノキの枝を置き、敲石で枝の表面を軽く敲きます。枝全面をムラなく敲いていくと、次第に芯と樹皮が離れてきて、樹皮の表面には縦に裂け目が入ります。裂け目に指を入れると芯から樹皮がずりりと剥けます。芯はとても硬くて、石で敲いたくらいでは潰れたり折れたりすることはありません。この方法で芯と樹皮を分離出来るのは、木が水を盛んに吸い上げる成長期にあたる春～初夏に採取した枝に限られます。樹皮と芯の間に水の通り道が出来ていて離れやすくなっているからです。また枝が乾燥してしまうと樹皮が芯に貼りついて剥がれなくなりますので、採取した後は枝を乾燥させないことが大切です。



①-1 使用する台石と敲石。



①-2 枝の表面を敲石で軽く敲くと、樹皮の表面が縦に裂けてきます。



①-3 樹皮の裂け目に沿って指を入れると、簡単に剥けます。



①-4 分離したヒノキの樹皮と芯。次の加工に備えてそれぞれ水に浸けておき、柔らかさを保ちます。

②樹皮を横材に加工する

樹皮は水にさらすと茶色い色素が抜けて水が真茶色になってくるので、何度か水を替えます。樹皮は指で縦に細く裂いて、あらかじめ幅 5～8 mm程度の紐状にしておきます。樹皮紐 1 本を平ら



②-1 樹皮を水にさらします。水が茶色くなるので何度か替えます。



②-2 樹皮を細く裂きます。指で簡単に裂くことができます。



②-3 樹皮の表皮を剥ぎます。平らな台石と竹べらを使います。

な台石の上に置き、ヘラ状の道具で茶色い表皮を剥ぎます。今回は竹べらを使いましたが、2枚貝や石器でも出来そうです。表皮は何度かこするとこそげ落ちて、下から白く艶のある内皮が現れます。内皮は薄くて弾力があり、丈夫な素材です。内皮は指で縦に細く裂き、幅 1.5 mm弱になるよう揃えていきます。内皮は水にさらし、水が透明になるまで何度か替えます。その後取り出し、風通しの良い日陰で乾燥させて保存します。使うときには水で湿らせれば柔らかくなります。



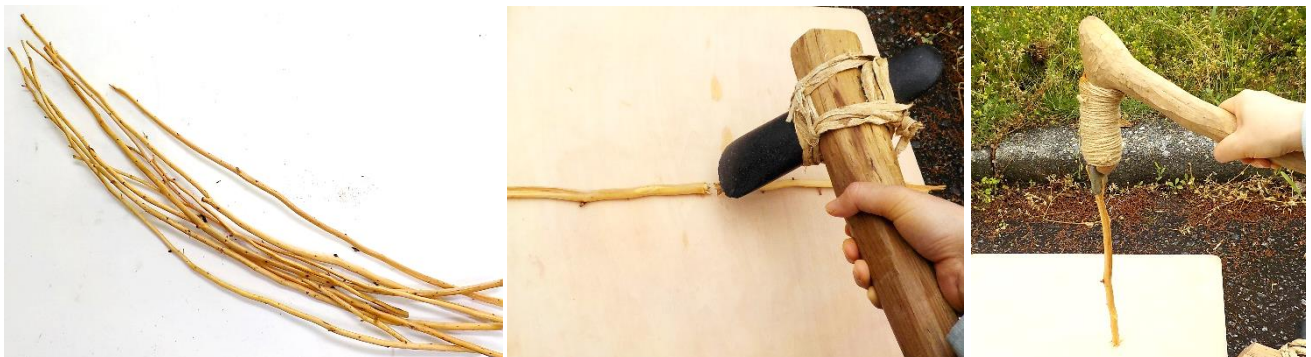
②-4 表皮を竹べらでこそげ落とすと、白くて丈夫な内皮が現れます。

②-5 内皮は細く裂いて水にさらします。

②-6 風通しの良い日陰で乾燥させてから保存します。

③ 芯を縦材に加工する

長い状態では扱いにくいので、磨製石斧で 25 cm位の扱いやすい長さに切りそろえた後、縦方向に割って分割材を作ります。ヒノキは硬い木材ですが、縦に割れやすい性質を持っています。分割材は更に細く割り裂いて、幅 3~4 mmの細棒状になるよう揃えます。太さを均一に調整するためには、石器や骨角器を作る時と同様に砥石も使ったと思われます。(朝田亜紀子) (vol. 10 に続く)



③-1 水にさらしておいたヒノキの芯

③-2 扱いやすい長さ(約 25 cm)に切りそろえます。

③-3 縦に割り裂いて分割材を作ります。



出土した編物拡大(遺物番号 3192)

今回製作した編物の縦材(左)と横材(右)の拡大写真。実際の出土品と見比べながら、素材の寸法や質感等が同じになるように作りました。